

いじめと攻撃性の問題について

ールネ・ジラルールの理論とその周辺ー

野村 洋平（龍谷大学）

はじめに

子どもたちの「いじめ」を社会現象としてクローズアップするようになってから既に 30 年余りが経過してきた。その間、多岐にわたる論考がなされ、子どもたちのいじめ現象を考える上では示唆に富むものも多数存在する。しかし、いまだ私たちはいじめの問題を解決することができず、子どもたちはいじめの経験から離れることはできない。いじめは子ども時代に経験しなければならない通過儀礼のひとつであり、学校における必要悪のひとつではないのかとの思いも、湧き上がって来ざるをえない。

では、なぜ私たちはいじめを解決することができないのか。それは、私たちがいじめの本質をまだ完全に捉え切れていないことに原因があるように思われる。様々な角度から議論がなされてはきたが、いじめを系統的に捉えるための共通の土台がなく、読むたびにころころといじめの印象が変化するように思われる。いじめの本質をなしているものは何か。なぜそれが私たちにはつかみきれないのか。いじめという現象の本質はつかめないものなのか、あるいはうすうすその本質をつかんでいながらも、その本質を覆い隠そうとするものが私たちの中に潜んでいるのだろうか。

いじめを系統的に捉え、その本質に迫る手掛かりとして、ルネ・ジラルールの著書を中心に読み解き、いじめ現象の本質をジラルールの議論からまず規定してみる。それと同時に、いじめに関わる暴力（攻撃性）の問題として、ジラルール理論から考えられることをまとめるとともに、ジラルール理論では分析できない攻撃性の問題について視野を拡大してみたい。

1. 三角形的欲望について

ルネ・ジラルールの主要な理論として、最もよく知られているところとなっているのは、「三角形的欲望」（あるいは「欲望の三角形」）の理論であろう。以下、簡単ではあるが、この「三角形的欲望」について概説したい。

「三角形的欲望」について主に論じられているのはジラルールの著書『欲望の現象学』においてである。そこでは、人々の間の距離（差異）が消失し

た時代においては、主体（S）は直接に対象（O）に対して欲望を向けるのではなく、対象（O）に向けられた媒体（M：主体のモデル）の欲望を主体（S）が模倣することによって対象（O）を求めるといふ、「三角形的欲望」の理論が提示される。

このような「三角形的欲望」の渦巻く世界においては、主体（S）は媒体（M）の欲望を模倣するわけだが、逆に媒体（M）も主体（S）の欲望を模倣することになり、S と M とは微小な差異（＝欲望の発露）をめぐって、お互いがお互いのモデル＝ライヴァルになるという関係が生まれてくる（相互模倣）。このようなモデル＝ライヴァルの関係において、主体は媒体に対して複雑な感情を抱かざるを得ない。なぜなら、自分の欲望を他者から借用しているという状況は、自律性を重んじられる現代人（学校であれば、生徒）にとっては、非常に屈辱を生じさせるものだからである。そうすると、あくまでも自分の自律性や自尊心をまもろうとする態度が生まれ、自己の欲望は自己から自然に発露されたものであると強く考えたくなる。そこから様々な困難が生じてくる。

このような状況では、人は嫉妬や羨望という問題に向き合わざるをえない。媒体は主体に対してあたかも自発的に示されたかに見える欲望・小さな差異を提示するが、その差異が提示されたとたん、モデル＝ライヴァルに対しての嫉妬・羨望が生じる。媒体はその点で主体にとっての障害物であるが、逆にその障害があることによって、主体の欲望はさらにかきたてられる。一方で主体はそのような自己の前に現われてくる障害を打倒して、自己の優位を証明したいとも思う。このような主体の状況は、媒体を主体として考えたときにも同様であるため、「三角形的欲望」に基づいた主体と媒体との相互模倣状況は、お互いがお互いに対しての嫉妬や羨望といった潜在的暴力が渦巻いている状況であるといえる。このような状況においては、潜在的暴力を介在させた、相互暴力（la violence réciproque）的な状況が生まれる。このような状況ではお互いがお互いの敵とならざるをえず、相互の攻撃の応酬のため、それぞれがもう一方からの復讐を恐れ、次第にお互いが疲弊する状況が生まれる。

2. 相互暴力から集合暴力へ

このようなお互いがお互いの「分身」であるというのっぴきならない状況から抜け出すためには、お互いに向けている敵意を別の何者かに向ける必要が生じる。ここでいう、「別の何者か」にあたるものが、「身代りの山羊」である。これは主に『暴力と聖なるもの』の主題となっている。ジラールはこの著作で、未開社会や神話における供犠を分析し、人間の暴力がどのように社会において現われてくるのかを明らかにしている。ジラールはもちろん現代的な現象であるいじめの問題に直接触れているわけではないが、ジラールが取り上げている供犠は、子どもたちの間で生じているいじめそのものであると言っても過言ではない。むしろいじめというものが、私たちの社会の中で生じている供犠であると言える。

供犠は私たちにとってどのような機能を持っていたのか。相互暴力が渦巻きだした、個々人間の差異の消失した社会において、自分たちの身を守るための唯一の手段が身代りの山羊（贖罪のいけにえ：la victim émissaire）に向けられる満場一致の現象（un phénomène d'unanimité）として現われる暴力による供犠だったのである。どうして満場一致の暴力が、社会を救うのか。差異が消失し、相互暴力が渦巻く社会においては、お互いがお互いに暴力による復讐を行うという危険が常に付きまとう。そうなれば、自分の身が危なくなり、社会や集団の秩序は維持できなくなる。そこで、復讐を行ってくる恐れのない人間、共同体と連続していながらも共同体に不必要である人間を選び出し、その人間へ満場一致の暴力を集中させることによって、相互暴力の段階を抜け出し、社会の秩序を回復するというのが、ジラールの供犠論である。

3. いじめの過程

【「三角形的欲望」による相互模倣】→【相互暴力の蔓延】→【身代りの山羊に対する満場一致の暴力（集合暴力）】。このようなジラール理論の流れをもとに、いじめの過程を以下に提示してみたい。

ここで一つ断っておかなければならないことがある。ジラールの理論をいじめに適応した先行研究についてである。ジラールの理論をいじめに適用した（ジラール理論に触れている）先行研究として、赤坂憲雄（1995）、亀山佳明（2001）、加野芳正（2011）がある。以下のいじめの過程の提示は、その中でもジラール理論の全容をいじめに適用している亀山の論考を土台とし作成したものである。

【いじめの過程】

①大状況の成立：消費社会の進行における「三角形的欲望」の激化

↓－【大状況は少なからず中状況に影響を与えるものと考えられる】

②中状況（教育的場面）：教師－生徒関係における「三角形的欲望」の学級での活用

↓

③小状況：教師の権威の失墜
（教師－生徒間の差異の消失。無規範、アノミー状況の成立）

↓

④子どもたちの中での相互模倣および相互暴力の激化
（例えば、生徒間のけんか、対教師暴力として現われる）

↓

⑤「身代りの山羊」になるべき人間へのくしるし>探し

↓

⑥「身代りの山羊」に対しての集合暴力＝儀礼としての供犠
（＜全員＞対＜一人＞の図式、差異の創出）

↓

⑦学級という小社会の秩序回復

↓

⑧再び、相互暴力の激化
（以下、④～⑧の過程が繰り返される）

このような過程をしっかりと押さえることによって、これまでのいじめ研究で論じられてきたことが、どの過程のことを述べているのか、またどの過程を詳述しているのかがはっきりとわかるようになると思われる。

4. いじめの過程に見られる諸種の攻撃性

上述した過程に見られるように、相互暴力の段階では比較的軽微な攻撃性が作用し、集合暴力の段階に至ると＜全員＞対＜一人＞の図式に見られるように集団による強度の攻撃性が発揮される。ジラールの理論においては、このような暴力（攻撃性）の発露と個人の心情との関連は十分に述べられていないため、いじめを行なう者の心情（なぜいじめを行なうことによって「快感」を伴うことになるのかなど）との関連を探っていく必要があるものと思われる。